



## 激動の人生と歩んだ水都軒は 創業 73 年

「子どもたちのために」

94 歳の今も現役

# なでしこ力

Power of Nadeshiko

創業 73 年の「お菓子の水都軒（すいとけん）」（千種区）を切り盛りする種田敏子さんは昭和 5 年生まれの 94 歳。今も駄菓子店店主として働き続ける。平日は毎日開店、営業時間は 12 時過ぎから 17 時過ぎまでだ。記者が取材時、駄菓子を数点購入させていただくと、木製の五つ玉の大きなそろばんで計算を始めた。その速さも商品説明の確かさも「現役経営者」だった。14 年前には、祖母の影響を受けてお孫さんが西山商店街（名東区）に駄菓子店「水都軒」を開業、地域の子どもたちに愛される店となっている。

### 94 歳の現役経営者

敏子さんは大垣市生まれで 7 人きょうだいの 4 番目。男兄弟に囲まれて、幼少期から親に大切に育てられ、親の言われるまま自己主張することなく育った。1952 年に結婚、夫は池下に菓子屋「水都軒（すいとけん）」を開業。数年後、菓子工場のある城木町に移転、池下公設市場内に「和洋菓子店水都軒」を開いた。

しかし 1962 年に離婚となり夫は家を出て、敏子さんが「和洋菓子店水都軒」店主となった。同年の池下公設市場の閉鎖にともない、店は本山市場内に移転。その後、同所で約 40 年営業を続けた。2001 年 4 月に本山市場が閉鎖となり、同年 9 月、城木町の自宅に水都軒を駄菓子店として開業、現在に至る。

### ノウハウは周囲から学び

#### 自らハイエースで商品を運ぶ

3 人の息子を抱え社会に放り出された敏子さん。「周囲には、お菓子の製造法を教えてくれる人、仕事先を紹介してくれる人などがいて、本当に人様に助けられてきました。今も周囲の人たちに助けられています。ですから今でも、朝に目が覚めるといつも、周囲の人に対して感謝をしながら起きています」と振り返った。

敏子さんは「水都軒」をひとりで切り盛りするため、運転免許を取得。昭和 37 年の免許取

得時に女性は敏子さんだけだった。ハイエース（トヨタ）に商品を積み込み、運転する姿は注目されたことだろう。当時、女性経営者を取り巻く環境は非常に厳しく、女性というだけで銀行融資が受けられない、契約をしてもらえない時代だった（女性起業者に対して運転資金を貸し渋る時代は平成まで続く）。

そんな社会状況でも、池下公設市場が立ち退きに遭っても、移転した本山市場で商売を繁盛させ、40 年間商売を続けた。店舗は一時、東山センターにも広げた時期もあるほど繁盛した。

### 大型スーパー台頭などで激変

しかし昭和 40 年代になると、大型スーパーが次々と進出し始め、公設市場内は歯が欠けるように店舗が無くなっていく。石油ショックなどにもみまわれ環境が激変する中でも「水



孫、ひ孫と毎月恒例の食事会を開催